

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十六年七月十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三八五号）

慈光

第三十三卷 第七号

目次

| | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|--------------------|---------------|----------------|----------------|
| 忘れ得ぬ人々…………… | 念仏詩抄…………… | 凡骨日誌抄（五）…………… | 御一代記聞書抄（続・二二）…………… | 三河の殉教者…………… | 信仰筆録…………… | 法味滴々…………… |
| ……………花田正夫…………… | ……………木村無相…………… | ……………西元宗助…………… | ……………井上善右エ門…………… | ……………多田鼎…………… | ……………近角常音…………… | ……………池山榮吉…………… |
| (21) | (18) | (14) | (11) | (6) | (2) | (1) |

法味滴々

池山榮吉

聖人の常の仰せ

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との仰せをこうむりて信じられた刹那、聖人の心肝に滲み出た文字

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」とあるが、聖人の常の仰せである。

これは聖人の獲得の原体験であり、同時にまた、其後につづくもろの体験の下地である。だから聖人のどの御述懐でもよい。たとえば歎異抄にある御言葉の一つに見入ってみるがよい。きつとその底から、この文学が滲み出てくる。啄木の歌に

灯影なき室に我あり
父と母、壁の中より杖つきて出す

とあるように。

俱会一処

「今世夢のうちのちぎりをしるべとして、来世の悟りの前のえにしを結ばんとなり。われおくれなば人に導かれ、われさきだたば、人を導きて、世々に知識となり、生々に善友となりて、ながく迷執を絶たむ」

亡き妻が不治の病にかかって、それと知れたとき、悲歎の中から、うれしさの身にあまるを覚えたのは、唯信鈔の結びのこの文であった。

樂しきはじめ憶うごと、哀(かな)しきおわり堪えがたし

やがて幽明さかいをへだてても、心と心とは永久に結びつけられて、浄土の対面を期することが出来るからである。

信仰筆録

人間の心には、善く出来た裏には必ず悪しきものができている。――人間の心の表裏関係をこれほど明瞭に知らせていただいたことはない。内愚外賢の味わいと合せていただくべきこと。

(大正十三・九・二十日)

「自然のことにわりにて柔和忍辱のころもいでくべし」

忍辱のころは願力自然より以外には起りようがない。すべて問題の解決をえるのはこの自然にある。だから、先ず本願の源泉にさかのぼること。これは如何なる場合においてでもそれ以外に解決のあらわれようはない。某君の問題にしてもほかからは開けてきようのないことだけは明らかになった。

帰国、報恩講勤修

近角常音

聖人の直説を今うけたまわることのできる仕合せを思つて感に堪えなかつた。

歎異抄の二条を話す。ことに人生に一つの真実があつてその真実のために人生のすべてが皆救われる意味を力説させていだいてきたのであつた。

あらゆる悪邪悪見の我慢もこれをおもうとき、さらにおそろしくない。一つとして捨てられるものはない、仮でも偽でも。

今自分のしてみようなきをあわれませられる慈悲であるということ。――前の時にいただいた心持を繰り返すのではない。今の自分の空虚をすてさせられぬ恵みであるということ。

これは、平生業成の講話を書きつつ、今さらのように気付かせていただいた。

不來迎の事

來迎は諸行を修するものに必要である。即ちすぐに親の手許にかえれぬものを引きもどすに在るのである。即ちそれだけへだてのあるものに必要であるという味わい。今までは來迎のある往生の方が立派であるような心持も潜んでおったのである。

來迎の否定は浄土教として尋常の話ではない。但し、眞宗においても來迎がないというのではない、期する必要があるというのである。これは現世利益でも同一の味わいになる。

○某兄のいう臨終正念の往生

某兄がきて、自分の今までの事を思うと、自分は臨終正念を望んでおったのであった云々。即ち困難の時に立派に信仰的に処して行きたい云々、にであった。これは非常に明言であつたと思う。

即ちその離れられた味わいが平生業成ということになる。來迎などということも、これを現せしめたいとなると大変な自力になる。この時は名利心。

またなくてはまいられぬとなると、これも妙なことになる。一切のこのような期することのなくなった味わいが、他力。

臨終正念や、來迎や、それらのものがある往生—浄土宗。

一念にそれらが全部解決して何ものも不用になった味わい—浄土眞宗。

○慈悲以外一点でもほかに期するところがあれば、それだけ信心は不純。

○親鸞一人がためなりけり、の両面観
一、自己を憐むお慈悲のありがたいという味。これは從來からいっておつた。

二、次にはその救われた自己の立場から、他の如何でなく、自分一人が何処までもやつてゆける味。

聖人の、すべてこの自己一人の経験から全部發動しておられるのである。即ち信仰が一般的のものでない味。自分一人の問題である。

○この救われた自己一人の所信からは、他の如何にかかわらず絶対の自信が發動してくること。これらのことも以上の事柄に関連して味わせていただけるのである。

○家兄の嚴父、悲母の教

これは實際生活として非常に意味深い教であると今更に味わ、せて貰ってきた。

近角師の嚴父悲母説といつてよい。一方に嚴父の訓導を

たて、その訓導にしたがいえないのを悲母で救済する。家庭がそうであるように、世界の全部がそれなのである。人間の思想界には嚴しい律法と、そのようにゆかぬのを察する悲母の心と。

思たとなえ、詔書が幾度渙発されても、みんながそれに従うとしないのだから、従う気のないものに何程勸諭を出されても、それは結局詔勅の価値をおとす以外に一益もない。悲母の心を落としてならぬことを知らされた。

○某家で兄上の信仰をお話して

—兄上の煩悶が、いわゆる信仰家の看板が破壊したものである位に言いまわし、欲しかったのは、何程自分が醜状曝露しても、それに最後まで呆れてくれぬ、友人であつたことを話したとき、來聴の某兄が泣き伏した。その友人の真情が徹したときは、友人があるからよい、位のことでなく、満身感謝の外ないことを味わ、せてもらうのである。この最後の最後まであきれぬ友人の意味は、今度ほど明らかに味わ、されたことはない。それがお慈悲ということなのである。

○第十八願の味わい

第十八願の文意は「我が眞実を如何なるものにも徹底せ

しめて……」であること、今度はじめて明らかにさせてもらった。そういうことは、前からよくいただいていたけれど、聖人よりいうときは、信樂は仏の信樂よりおこなるのであるから、明らかにそういうものである。即ち第十八願文は徹底願であると味わつてよいと思う。徹底願があるから徹底信があわられてくる。

○三願転入ということ(某夫人にお話して)

某夫人が、横浜で信心をいただいた／＼と云われるのに対して、それはいわぬ方がよいとの事を話すに、自分の事を思い出させて貰ったのである。

自分とはじかに広大の眞実にびっくりさせられた覚えはある。が、いつのまにかそれが自分の驕慢に転じておつたことにびっくりした。それも本来の自分の横着性からである。即ち信仰は自分自身をよけいに横着にしたか知らぬか、決してよくはしなかった。それは信仰のとがではない、私の性からであつた。それではいかぬと思つたが、何ぞしらん、それに呆れぬとの事であつたのである。呆れられぬ味わいははじめてこれで知らせていただいた。その後も／＼上記のごとく、今にいたるまで、その反覆である。自分でよいと思つている時に、きつとそれが間違つてゐる。

三願転入ということは、実にありがたい事であると考えられる。しかも、その転入の具合は、自分のいかぬことをとがめられる方で転入するのでなしに、いかぬものにどれだけでも手綱をゆるめられる御慈悲の力で転入せしめられる味わいの深いこと。今になると唯お見捨てない思召しがありがたいばかりである。

(大正十三年十二月九日)

○ 兄上の正法興隆の精神

曇鸞大師が正法誹謗は許しておられぬというのに関連して、正法が唯一大切であることを説かれてあるのを拝読して、兄上の正法興隆の信仰の今更に熾烈であられることを知らせてもらった。

兄上の所信では、思想善導も何もすべて正法興隆にきまるのである。それが聖徳太子の三宝興隆の精神であることもはじめてわからせていただいた。実に偉大なる信念、思想である。正法とはよき言葉である。正法が立たねば、思想の立ちようがない。

○ 信巻末の阿闍世王入信の結末の文と、兄上の正法興隆の精神
上記の兄上の所説が、阿闍世王入信の結末の文に出てく

三河の殉教者

道は私共を永えに救わせ給う。私共は心と身とを捧げてこの道を護り、これを現わし、これに報いねばならぬ。古の聖者は自ら身を燃し、法に捧げ、世を照らされた。数多の義人はその後が続いて、道のために血を流した。噫、殉教の血、これほど尊いものが世にあるうか。

わが三河の近い歴史は、聖人親鸞の同朋の血によって彩られてあることは私共にとっての誇である、これ pensando してさえ、胸の躍るのをおさえることができぬ。

二 徳川幕府が、わが国の民心を乱すまいと願って、三百年の間、仏教を政治の具に供したことは、一面にはその望み通りに世界に稀な大平を招いたが、一面には、少からず僧侶を驕らせ、怠けさせた。国学者や儒者の胸には反抗の念が萌し、明治の維新になってにわかに燃えあがった。

「排仏毀釈」の火の手は、何事も古いものは打破せという革命の気分にあふられて広く四方に拡がった。鹿児島・

る聖人の信念であることを初めて承知して、感激言葉にあらわしようがない。

聖人の信念、太子の精神、兄上の信念。しかも正法のきわまるどころ、無碍道の慈悲味とはなれないのである。

(大正十三年十二月十二日)

○ 兄上のいわれる嚴父悲母の信味

これは、ます／＼容易ならぬ事であると気がついてくる。今までは、父がいましめるのを母があわれむとだけ単純に味わっていた。父の心、母の心、同一にいたたくにはまず悲母の恵みに救われて、自身が転換させられるより他ないのである。自身の転換のない時は、母に甘えて、父を無視するか、父に従って母を無視するか、そのいずれかになつてくる。嚴父悲母説の要は、父と母と同一に頂けるところにある。

○ 正法、即無碍道、即真宗

真宗という一宗の名にきこえてどうにもならぬ。内容は無碍道にある。無碍道を説けば真宗が説ける。聖人が真宗といわれた味わいが此頃になつていよ／＼身にしみてくる。正法は無碍道のゆえに。思想の安定は無碍道になければならぬ。

多田鼎

隠岐・多度津・富山・松本等は、烈しく焰に襲われたが、三河もこれを免れることはできなかった。

駿河の菊間藩は、明和の頃から三河の大浜に陣屋をかまえ、碧海・幡豆の両郡にわたっている領地を治めさせてあつたところ、またこの排仏の思想に動かされて、この地方が特別に厚く真宗の教によって育てられているのを深く慮ずられ、領内の人々に、神社の前で念仏を禁じ、夜の守、日の守の祈禱を勧め、祝詞を読ませ、寺がその開基や歴代の任聴の努力や同朋の協力によって出来た道場であることを見無視してこれを廃し、或は併合しようと企図しかかった。これが明治四年の春で、岡崎・刈谷・西尾の諸藩も、都合によってこれに呼応するよう見え、田原ではこれにかかっていた。

真宗の僧俗は、これこそわが宗門、随って我信念を迫害するものと認めた。年長の者は穩かに進まうと思つたが、少壯の者は、今はじつとして居られず、憤然とこれと争う

ことになった。その中心は、実に石川台嶺師であった。

三

石川師、名は了園、台嶺とはその号で、天保十四年正月朔日に、幡豆郡室村の順成寺に誕生、楠潜龍師の弟・平野円盛師の兄であつて、後に碧海郡小川村の蓮泉寺に入つて寺務をとらるることになった。天性峻厳で、而も機略に富み、はやくから同朋の仰望を集められていた。明治の初、深く宗門の大勢を憂い、専修坊法沢、西円寺誓鑑の両師と結び、護法場を開き、幾度も暮戸の会所に集つて、二百余名の同志と共に道を講じ法を語つて、大に世に動くべき用意をせられていた。

菊間藩が、どしどしと其方針を進めるについて、三月二日、同志の者が暮戸に会した。台嶺師は事の重大なるを見て、心ひそかに決する所があつた。そこで法沢師と議して八日更に暮戸に会した。その時百名程集り、種々評議の末、いよいよ大浜に赴いて最後の談判をすることにきまつた。同志は共に血をそそいで誓つた。夜が明けかけたので、仏前で読経を終え、此世のお暇乞をして決死の僧侶三十名余相携えて暮戸を立つた。沿道の門徒これを知り、彼方此方から馳せ参じ、矢作川の堤を南に下つて、米津の龍讚寺に立寄つた頃は、無数の同行が境内にあふれて、立錫の余地もなかつた。台嶺師は本堂の広椽に立つて、つぶさに同

志の方針をのべ、ねんごろに暴挙をひかえるように諭されたが、午後には群集が益々ふえ、暫くの間、寺の側の藪を切り尽し、手に手に竹槍を揮い、雨を冒して驚塚に入りこんだ。

大浜の菊間藩出張所では、事情を聞いて、杉山少属が四人の随員と共に驚塚の庄屋、片山俊次郎の宅に出張し、僧侶の総代を呼んでその理由をたずねた。台嶺師は四名の同志と共にそこで弁明をし、一応、村の蓮成寺に引取り、更に法沢師等と杉山少属に会つて藩の反省を求められた。少属は許さぬ、幾度も押問答は繰返されたが果てがない。日は暮れ、群衆は焦り、蓮成寺の鐘を烈しく打ち初めた。僧侶は何度も杵の綱を断つたが、門徒は直に繋いで鳴らした。殺気は村に満ち、群衆はついに片山宅に押寄せて、関の声を揚げ、石や瓦を投げた。台嶺・法沢の二師は、穩かに談判を進められたが、杉山少属は勢ついに窮まると見て、随員と共に抜刀して躍り出た。群衆はサツと引いた。杉山氏等はその間を抜けた、群衆はそれを追ひ、ついに随員の藤岡薫氏を殺し、進んで大浜に向おうとしたが、大浜から来た一隊の兵がこれを抑えた。翌十日になつて、西尾・重原・刈谷・西端の諸藩から鎮定のために兵を出したので騒動は全くおさまつた。

廿四日、静岡・豊橋・田原・西大平・拳母・重原・伊奈

・菊間等の諸藩が、大浜に会して善後策を議し、且つ京都の東本願寺本山に使僧の差向を求めた、東瀛師、ついで義導師がこれに應じて来られた。服部少参事から、今日まで朝日を拝ませたことはなく、神前の祝詞が宗旨に背かば相止むべく、寺院の廃合も致すまじく、広く誤解のないように諭して頂きたいと求めた。師はこれを諾し、三河をあまねく巡つて、僧俗を諭され、人心は日を逐うて鎮まつた。

四

台嶺師始め同志一同は、潔く縛につき、渡辺民部大丞が岡崎に来て、四月の初めに審問が開かれた。一同はここに集められた。岡崎藩ではわか事として、一面は土堀を用い、油紙の天井で、一時の間に合せ、其間、御鷹部屋や馬部屋などに格子戸をつけ仮牢を造りこれに入れた。一同はつつまじやかにここに日を送つた。

中にて台嶺・法沢二師の行状は正しく、獄吏もほめ讃えた。渡辺大丞も、台嶺師を殺すことは惜しいと云つた程であつた。師は書を同囚の人に回して、朝暮の勤行の時を定めてねんごろに勤め、勤行や食事の間は称名を励み聖教を読み、其外は詩歌をたしなみ、起臥進退、すべて礼儀正しくするようにと誡められた。又自ら「改悔文法話」を著し報恩講の廿八日には先徳の法語を書き、その解釈をもしたため、又幾度も手紙でその母堂や令室や同行を諭された。

令室への手紙には「此法語を御身も読み、母上にも聞かせ、幼児にも成長の上はよくよく聞かせよ」との遺言もある。時々詩もつくられた。「今春三月幽囚に繋る、日は龍城を繞つて己に晩秋、二十九年空く夢の若し、丹心未だ尽さず恨み留め難し」とは其中の一首である。

或獄吏はひそかに師に脱獄を勧めたが、師はこれを拒まれた。審問についても、師は一同と共に深く決していられたので、つつまじく偽らず打明けられたから、事はさつさとはかどつた。どうしても師一人は死刑からのがれられぬとの噂がひろがった時、数多の同行は師のために命を乞ひ、又は代つて死に就きたいと願ひ出た者さへあつたが、いずれも許されなかつた。

かくて事は着々と進んだけれども、藤岡薫氏に手を下した者がわからぬために、徒らに月日のみかさなつて、上下共にひとかたならぬ迷惑をした。榊原喜与七氏は、その時嫌疑をうけて縛せられた者の一人であつた。彼は碧海郡城ヶ入の人で、農家の生れで角力取であつた。獄中台嶺師の隣室にあつて、壁をへだてて師の教を受け、明らかに仏願の思召を信受し、朝暮に師の勤行には助音をして、報恩の望みの果たされるのを喜んでいたが、ひそかに一般の迷惑を思い、自ら進んで、藤岡氏の死についての罪を引受けた。そのために事件は急にきまつて、十二月廿七日朝、一同

岡崎城の大広間に呼出され、最後の宣告があった。台嶺師は斬罪、喜与七氏は絞罪であったが、この二人は直には宣告せず、各本藩へ引渡しの上、申し渡すとの事であった。また、法沢師は准流十年、其余三十七名の僧俗は、各懲役三年から、禁錮、杖罪、それぞれ刑に処せられた。

台嶺師はこの申渡しを受けて、ねんごろに別れを告げられた。「聞く所によれば、菊間藩は我々の要求を容れたとのことであれば、私が初めからの覚悟の如く、刑場の露と消えるは私の喜びである。殊に諸君が寛典に浴せらるるは、護法のために非常な幸である。思うに今後宗門はいよいよ多事であれば、諸君他日出獄の上は、何とぞ今日的心をもつて法のために尽くせ。此世のご縁は今日を限りとして、再会はお浄土にて」との事であった。同志は云うまでもなく、獄吏の中、また共に涙せぬ者はなかった。かくて直に、台嶺師は西尾藩に、喜与七氏は西尾藩に引渡され、其他も各々本藩に移された。

台嶺師の西尾に入るや、一往引廻しの上、公に斬罪に処せらるべき筈であったのに、藩は数多の門徒がこれを見て激昂することを恐れ、急に刑の執行せられることになつてにわかには西尾町奥屋敷の刑場にてはかなくなつた。時に廿九才であられた。喜与七氏がその郷里に近づくと、数多の同朋が堤のように路の両側に並んで、涙にむせんで見送

傍に病んでいた順静師もすぐに後を追うた。六月一日、丁順師も亡くなった。法沢師もまた程なく同月廿三日に逝かれた。年は四十であった。

明治廿二年、大赦が行われて、同志一同の罪名はここに消えた。翌年一月三十日、壮嚴な奉告式が、同志の墓前で行われた。満場、追慕の思いにむせんだ。

五

この殉教の血と涙とが、三河の歴史を彩つてから、ここに（昭和二年）丁度五十年を経た。幸に、排仏毀釈の火の手は、これがために止んだが、私共は今やますます肉体を本として精神を忘れ、自分の浅はかな欲を主として、道にそむくことを顧みぬようになってきた。こうした私共に対して、この血と涙とは、如何に尊い激励をあたえるであらうか。大正九年八月の中旬に岡崎の三河別院で、この殉教者の遺品の展覧会が開かれた。台嶺師の血に染められた白衣や襦袢は、他の同志の遺品と共に、数多の同朋の胸をせまらしめた。一日、四十歳程の一婦人が、その前に立つた「みだりに陳列の品に触つてはならぬ」との注意書が掲げられてあるのに、その婦人は涙にむせびつつ進んで幾度もその白衣を撫でては、その手で自分の胸を撫でていた。けだしこの殉教者の胸に躍つたその神聖なる殉教の精神をあらたに自分の胸にすりこもうとしたのであろうか。願く

〇

つた。氏は莞爾として「有難うございます。一寸お先へまいます」と言うては、別れを告げながら進んだ。その属していた西野町称念寺の実円師は、浄林寺智耕師を遣わしてその胸中の安否を問わしめられた。氏は大いに喜んで、「獄中における台嶺師の御教化によつて、正しく本願の大悲を受くることができた。何とぞ御安心下さるようには」と答えた。「何か心残りはないか」として問われた処「ただ母の仏事を勤めずに居ることのみ」との事であった故、そこで一巻の読経をあげられた。氏は丁寧に乗つて刑場に入った。刑吏が「目隠しを」と申すのを斥けて「往くべき処へ往きます」とて、従容として絞首台にのぼつた。刑場をかこむ同朋一同、感激の涙を流さぬものはなかった。年は三十七であった。

三十余名の同志は各藩の粗末な牢舎に、菰や莖をひきかつぶて、冬の涙も凍る程の寒さを忍んだ。翌五年、藩が廢せられ額田県が置かれ、監獄が岡崎に出来たので二月十日に同志は再びここに会したが、六年二月に徹師は病のため亡くなった。三月に一同は名古屋に移された。その監房は、旧尾張候の兵糧蔵であつて、床低く窓狭く風は通わず無数の穀虫が来ては肌を刺すので夜も眠られず、昼は追いつ使われて、ために健康を保つ者が少かつた。

四月三十日、徹師が急に亡くなった。これを聞いて、

ば、私共をしてこの一同朋の念願に、共に燃えしめよ。この血、この涙こそ、我と国と世とを真に活かすものである。

聖語抄

聖者の精神は、造化の胸に入り、天地の至奥に参じて、悠久の時とその生命を等しくする。

人間の恩愛を譬うれば、衆鳥が一夜を大樹の梢に明かすようなものである。親族の契りも僅かに短い一夜であつて明くれば各別れ飛んで、定めぬ禍福に従わねばならぬ。

大迦葉は教団の禍を以て自らの禍となし、能く為すべき事をなせば、己は早く身を引いて淡々として水のごとくに去る。

失われた時を求めて

ブルースト（一九二二没）

一回かぎりの人生
帰り道のない旅だ
毎日を丁寧に生きよう

御一代記聞書抄 (続・二二)

万事について善き事を思ひ付くるは御恩なり、悪しき事だに思ひ捨てたるは御恩なり、捨つるも取るも何れも御恩なり(第二九六条)

人間には二つの心が併存して葛藤しています。これをゲテが「ファウスト」の中で巧に次のように語っています。おれの胸には、あゝ、二つの魂が住んでいて、それが互に離れたがっている。一方のやつは逞しい愛欲に燃え、絡みつく官能をもって現世に執着する。他のものは無理にも塵の世を離れて、崇高な先人の霊界へ昇ってゆく。これは確かに人間の心の現実を凝視した言葉であります。官能の現世に執着する心から自己中心の悪心も生じます。うし、塵の世を離れようとする心から利他の善心も生じます。ありましよう。人間は不思議な存在です。しかしこのような併存して相反する心に立って、一方の

善」と自からの行為を反省された趣きと自から軌を一にすることが思い合われるのであります。

二

さらに仏陀の教えに耳傾けますと、我々人間の意識の層下には、我執という幻の己れに執着する迷妄が根深く宿り潜んでいることを知らしめられます。我々は容易に此の事実気づくことなく生きています。返りみると俺が〴〵という思いを底に持たぬ人がありましようか。平素は嘘を厭い真を願うようですが、自分の事になると逆転します。お世辞の嘘と知っても褒められるとうれしく、本当だと判っていても自分の失を指摘されると不快になる。そこに真偽とは別な我執の自愛が潜んでいる事を知るので

また「聞書」に「皆人毎に善き事を言ひもし働きもすることあれば、真俗ともにそれを我がよき者にはやなりて、その心にて御恩といふことは打忘れて、我が心本になるによりて冥加に尽きて世間仏法ともに悪しき心が必ず〴〵出来するなり一大事なり」(二二七条)と語られている一節は身に沁みます。「我れ為せり」という功名心というか自負心というか「我が善き者にはやなりて」の思いがつき纏って止まぬのは何とも処置し難い人間の現実です。

自分に我執があれば相手にも当然ありましよう。執われ

井 上 善右工門

善を行じようとする、どうしても他の一方を無理にも押えつけ斥けて強行しなければなりません。カントという学者はこのような状態を良心(実践理性)のゾレンと申しました。ゾレンというのは、捨てておけば反対に向うであろう傾向性を押えて「……すべし」と心に命令し、為すべきを為すという意味です。これには極めて厳粛な努力の連続が必要で

ところが、その同じカントがまたこんな告白をしているのです。

人間の心胸の底は知りたいもので、理性の命令に従おうと自ら感じて為た場合でも、その底に悪徳に仕えるような自愛の衝動がわれ知らず一緒に動いていなかったか否か、誰もこれを十分に知ることは出来ないのである。こういう意味のことを別の二つの書物に繰返して語っているのです。これはカントという人の真面目な自己凝視の避けられない告白であつたと思ひます。親鸞聖人が「雑毒の

た我と我が鉢合せして内心の闘争を出現することは悲しい人間の姿といわねばなりません。

三

本条に「善き事を思ひ付くるは御恩なり」とあるのはカントがいうような理性の命法としての善ではありません。二二七条にいわれている我執を仏の智慧から知らしめられると共に、その執我の己れをどこ〴〵までも捨てたまわぬ大悲の真実に遇うて、あゝ、申訳ない事であると感じると共に仏心を仰ぎ参らするとき、今までとは違った大きな御催しにあつかつて、危く溝に落ちるところからフト立直らせたいいただきます。「悪しき事だに思い捨てたるは御恩なり」とあるのはそうした趣きでありましよう。そしてまた皆んなが幸せであるようにという自然の思いが湧くのも不思議であります。そこには最早や「我がよき者にはやなりて……:」というような思いが侵入する余地がありません。ただ如来の徳を仰ぐばかりですから御恩なりという言葉が自然に流れ出ているのであります。

御恩とは如来の御恵みということ。穢悪汚染の身に差し向けて下さつた如来の御催しを実感する言葉です。「捨つるも取るも」というのは悪しきを思い捨て、善きを思い付くる意であることは、明らかです。ここには、思い付き思い捨てるに何の力みもありません。自然法爾の出来事です。

知らず思わずして法の真実になわしめられることを「佛法は無我にて候」(八〇条、一六〇条)と申されています。有難い言葉であります。

しかし我々にあつては、常に悪しきを思い捨てて善きことに思い付くかというに、そうは参らぬのです。大悲がやるせなくこの胸の扉をたたいて下さるにもかかわらず我執の情勢は牢固たるものでありますから、殻を閉じて如来の御催しを自ら遮り障えている場合も実に多いのです。そして事過ぎてから済まぬ事であつたと気づき、申訳ない事であつたと慚愧に立帰るのであります。ここに帰らせていただくこともまた摂取不捨の仏徳のしからしめるところであり、有難くおうけなき事と慚愧歡喜の思いを得しめられます。これまた御恩の外なるものではないのであります。(六月十日)



凡骨日誌抄(5)

念仏の世界

近頃、ひもどいた本の中で、『念仏世界—安部克己の信と生涯』(大分市豊海四—3—5、願生会刊・柿本謙誠編集、価800円)ほどに感動した信仰書はすくない。

安部さんについては、既に本誌に紹介させていただいたことがある。その略歴を記すと、大分市にて製材業を営み、故足利浄円師に篤く帰依、生涯法を聞いてやまず、深く念仏をたしなんで昭和五十五年五月十日、命終(悪性腫)行年五十八才であられた。

今この書の中の氏の坐談の聞き書の一部を、左に摘記してみよう。

安部克己大士考談抄。

命がけの求道ということが、いわれませんが、(じっさいは)仏から命をかけられているんです。命をかけられてみると、私たちが、ほんとうに命をかけなければならぬものは何かということが、教えられてくる。こっちは命かけていませんが、(仏から)命かけられているんですよ。

庄松ありのままの記

「人が拾うて喜ぶ」
或時、勝覚寺の先代住職が庄松に、往相廻向の御利益を知つて居るかと問うたれば、庄松の答に「あなたの御仕事を、おらが知つたことか」。

住職、それでは、還相廻向の御利益はと云えば、庄松の答に「それはおらが喜ぶと、人が拾うて喜ぶのじゃ」と云つた。

「山の南に阿波がある」

大川郡五名山村字日下の鈴村という処に駒造と云える人あり、籠で庄松を招待して法座を開きしが、その中の一人が、地獄や極楽がありとはいへど、目に見えぬゆえ疑がはれぬと云えば、庄松「この向うの山の南に阿波という国があるぞ」と云つた。

「たいくしたころじゃ」

庄松、津田町神野の田中半九郎氏方にて、長々世話になつてありし時、主人の半九郎氏、庄松に向いて、第十八願のおこころを一口に云うて聞かせて下されと云えば、庄松「親から下されるをたいくしたころじゃ」と云つた。

いたぐくこと?

西元宗助

だから、命かけずして生死出すべき道ということは、わかる筈がないんで、生死出すべき道ということは、命がけの道ということなんです。

ですから、いのちの問題を、命をかけずして考えようといふのは、甘いんですよ。ところが、そういう甘い考え方が、甘いもの(われらに対し)、仏のほうから命をかけられてきたんです。阿弥陀如来は命がけで、わたしを救つておられる。その命がけのお心が到りとどいてくださって始めて、こっちのいのちまかされるのです。(このように)まかせられる心も、こっちが越したものはなく、命をかけてくださった如来に、有難う(南無阿弥陀仏)という、ただそれだけののです(同書二頁)云々。

左に、この三、四日の日誌を、文字通り抄録してご覧に供します。かんにんしてくだされ。

五月二十一日(木)快晴。

今日は親鸞聖人御降誕会。ご招待いただいたいましたので久振りにご本山に詣る。毎年、ぜひ祝賀能を願いながら、いつも支障あって参れませんでした。ことしは都合よく七・八年ぶりに、国宝の能舞台で演じられる目出たい『高砂』（親世流）を拝観させていただきました。聴衆千数百の方々と共に約三時間、端坐して拝聴し、しみじみとした気持ちになる。まだ『熊野』（ゆや）のお能がありました。中座して御影堂へ。

五月二十二日（金）曇天

今夜は、わが家で読書会。よって午前中は、昨夜にひきつづいて御聖教の下調べ。午後は家内と玄関及び部屋のお掃除、そしてお内仏の荘厳をする。それは楽しいことでありました。

尤もこのように書くと、殊勝すぎますので、少し註釈を加えておく。わが家は平素、とてもお掃除が行き届かぬので、このような場合、あわててするだけ。ことに一年八カ月になる悠峰（ゆうほう）という孫の腕白坊と共に暮すようになってからは大変、げんに先日、あるお坊さまが拙宅にお見えになり、お内仏に合掌してくださいました。犯人は腕白坊にちがいありませんが、弁解するわけにもまいりません。や、申訳ないことで、ということと済ませてしまいま

した。しかし、今日は、そういうわけにまいりません。頼むから、今日だけはお客間にいれるナと、厳命をしたことあります。

五月二十三日（土）曇天

この日は午後一時から、大谷婦人会館ホールで、大谷大・仏教青年会二十五周年記念の講演会がある。そして、その講演及びディスカッションの講師として、筑紫女学園短大の上田義文先生と共に、私も参加することになっていました。

ところが思いかけぬことになった。それというのも上田先生、発熱なさって昨夕、大阪空港から京都グランド・ホテルに投宿されたものの、参加がむづかしいかも知れぬという。どうなることかと案じていましたら、午前十一時すぎ、委員長から電話があった。それによると、幸い熱もさがられたので、最後の質疑応答には上田先生も参加される。しかし講演のほうは、非常に疲れられるので、今ホテルの部屋で、テープに吹き込みをして、それを以って講演に代えることになったので、およろしくと。

そのことを聞きしてホッとしながら、大谷ホールにかけつけ、大会テーマの「出離生死の道」のテーマに基づいて、すこし上がり気味に、お話させていただきました。

ついで司会者の事情説明があつて、上田先生の録音テー

授の感話は、秘話に近い趣きもありますので、そのうち、覚えの一端を左に記しておく。

○ ○

プが会場に流される。テープのことであり、どうかと案じられました。意外によく聞こえ、みんな、しーんとする。そしてそのあとの、質疑応答には、私と共に先生も壇上の椅子に一時間余、着席なさって、案外活潑にご発言になった。聴衆は約百五十名余。なお、目だたぬよう片隅の席に、本願寺のお裏方の範子さまが、最後までおられたのには、いささか心うたれる。五月二十四日（日）雨

午前は休養。午後は足利浄円先生忌（昭和三十五年五月二十五日）及び浄円先生の女婿であり養嗣子の今田彰夫氏忌（昭和三十三年五月十六日）法要のため、山ノ内の角ノ御坊ちかくの今田邸に赴く。

八十六才におなりの桐溪順忍和上はじめ瓜生津隆雄、石田充之の和上さん。それに東京から特に西下された玉城康四郎兄はじめ井上善右工門、花岡大学、中井玄英の諸兄に金子大榮師未亡人。そして同朋舎・今田家の方々と私とで座敷はいっぱいになった。

まず瓜生津和上、お導師となり給うて、一同、阿弥陀經をいただく。彰夫仏いますが如く。ついで桐溪和上はじめ、それぞれに謝恩の想出話をしたことでありすが、その中で、玉城先生（東京大学名誉教

龍

し、いくらなんでも初対面だと思います。その日、夜行の汽車で熊本に帰っていったのですが、実はあまりの感動にその夜は、ほとんど一睡もしないで、先生の仰せのことなど、車中で繰返し思い起したことでございます。（略）ともかく、それからというものは、よき師をえたりと、しばしば先生宅にお伺いし、そして、ついに配偶者のお世

話まで先生にお願いする決意をするにいたったのです。それというのでも、わたしは自分で女房になるひとを探す器量はないし、これはもう浄円師にお任せするにかぎるとなつて、先生に一書を呈した次第です。しかしお任せするといつても、相手の気持―意嚮といふこともあるので、結局、浄円先生と今田夫妻立会いのうえで、今の女房とお見合したといふような次第。

さてそれから、戦後、先生は広島島の「生野島」に、ある夢をいだいてお住いになつたわけですが、ここにもしよつちゆうお伺いし、それから熊本に先生をお迎えして講演会を催したこともございますが、熊本駅に先生をお迎えしたときの嬉しかったこと。ともかく想い出はつきません。

皆さまもご経験のように、あれもお聞きしたい、これもお伺いたい、いろんな問題―悩み―をかかえて、先生の前に坐つてみると、その問題のおのずから答えが、あたえられていく。先生は、ただ、フンというか、シユンというか独特の寂かなお声で、お聞きくださつて、肯かされるだけ。それでいて万事がとけていく。それは、先生のお好きな「論註」のあの「阿修羅の琴の鼓する者なしと雖も音曲の自然なるが如し」を想わせるような、先生の自然のご風格。先生は、われらと違つて、どうも生れながらの仏、菩薩であつたので、わたしどもを済度せんがためにこの世に出てこ

念仏詩抄

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

「称えつつ

香師おおせに
香師―香樹院徳龍師

「そも／＼このお念仏は
何のために成就して
何のために称えさせ給うやと
心をくだいて思えば
常に称えるのが
常に聞くことになる――」

「弥陀の名号称えつつ」

そのオイワレを

聞きに聞き

思いに思うほかはない

られ、娑婆の縁つきで、ついに浄土に還つていかれたと、そのような想いを、最近いよいよ深くするんですが、と、その讃嘆の言葉はつきることがなかった。

以上は、玉城先生のお話の一端。大事な点の聞き損いも聞きおとしもございませう。お許し下され。

庄松ありのままの記

或人「庄松はん如来の御恩といふことは何ともないが、真実領解が出来たら、御恩／＼の日暮しが出来ますか」と

庄松「おらはそんなむつかしいこと知らぬ、お前はお前の持つたまま暮せ、おらはおらだけで暮す、そんなこと聞いて何にする」と云つた。

「愧かししかろうじや」

「喜ばいでもまいれるだろうか」と尋ねると、庄松「参れる／＼」と。しばらくして曰く「喜ばんのお浄土へ参られたら、お阿弥陀様に愧かしかりうじや」と。

木村無相

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

無相よ

香師おおせに
「命のちぢまるは
長き日の暮るる
ごとくなること――」

無相よ

もうアトが無い

アトが無い

ナムアミダブツ する法を尋ねるにいたつたので、
ナムアミダブツ ナムアミダブツ ナムアミダブツ
ナムアミダブツ ナムアミダブツ ナムアミダブツ

わたしの領解 (りようげ)

香師おおせに 先生は法皇の御野鳥に、ある

私の領解なり「一」の領解は先生をお聴きして講義を

お助けの法は念ふしかるに思ひ出はつたまゝせん

ナムアミダブツ 一 香師 香師の御野鳥に、ある

ナムアミダブツ 一 香師 香師の御野鳥に、ある

ナムアミダブツ 一 香師 香師の御野鳥に、ある

念ふ 念ふ 念ふ 念ふ 念ふ 念ふ 念ふ 念ふ

臨終

香師おおせに

ただ今が臨終と思わば
ただちに聞き得られ
ありがとう受けらるる

いつも臨終

ただ今が臨終

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ソノママ

香師おおせに

鶴の足は長い
鴨の足は短い

ソノママのお助けじゃ

ナムアミダブツ

マチガワセたら

香師おおせに

六尺の棒(ぼう)で
大地を打ちはずすことが
あつても

往生一つはマチガイない

マチガワセたら

アミダと言えぬ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

忘れ得ぬ人々

花 田 正 夫

泥中の蓮華

随分前のことであるが、私が奈良市の浄教寺に伺っていた時、かねてからよく存じていた刑務所の看守長をしていられたTさんが、何とも云えぬ嬉しそうな顔をして尋ねて来て下って、念仏されながら次のような打ち明け話をして下さった。

「所内で念仏の花が咲きはじめました、不思議なことです。実は先日、或囚人があまりに我儘で、他と問題ばかり起しますので独房に移していました。ところが看守が飛んで来て、看守長、どうしましょうか。例の囚人に昼食を持って行きましたら、こんな水くさい味噌汁が食べられるかと云って突っ返しました。

そこで私が一寸味をみると、多少味が薄いので、早速味をよくして、今度は自分が持つて行くこと云って、それを運びますと、こんなものが食べられるか、と云うなり、碗を鷲掴みしていきなり私に投げつけました。時は夏で、白い

いられるに違いないと思います、それをお聞かせ下さい、とのことでありました。そこで私はありのままに、

いや自分には何も持ち合せはない。君が反抗した時、どうしてやろうかと、むかつ腹が立った。ただその時自分の口から不思議に念仏が浮かび、それによって、待て！と自然に省みさせられた。君の反抗は今日一回だけであるが自分は仏様に永年逆い続けて来たことを思い出し、君によって自分の浅ましい姿を教えてもらえたと、念仏の中で御札をしていたのだ、と。

すると、そのお念仏の話をもつと教えて下さいと申しますので、それはその道の専門の教師さんに聞いておくれ、と云う。いや看守長さんからは是非聞きたいと重ねて申しますので、その日から昼の休憩の時には出来る限り彼をたずねて、私の懺悔話をしたりして、愚問愚答を続けていますうちに、彼もお念仏申すようになりました。

その後、彼を訪れると、こちらに向きもしないで、念仏申しながら一通の手紙を持ちかえ／＼していました。どうしたのかと聞きますと。はじめて口を開いて、お恥かしいことですよ、手紙をおし戴きて、実はこれは故郷の母からの手紙です。いつも、身体に気をつけて、お役人方の言われることをよく守っておくれ。お前のために、着物も布団もこしらえたから、出所する時は、真直ぐに家に帰るよう

官服が汚れてしまいました。

その時、彼のひがみが無性に腹が立ちました、切角味をよくして持つて来てやったのに！と。ところが、その私の口からお念仏が出て下さったのです。ハッと驚くと共に、待て！彼は人の親切をはねかえしたが、自分は永い年月の間、仏様のお慈悲をはねかえし／＼して来たことがかえりみられ、こんな自分には彼を責める資格は毛頭なかったと気付くとお念仏が次々に浮かび出て心もおさまり、早速官舎に帰って服を着換えました。その日の午後所内を巡廻していますと、後ろから、看守長、々々々と呼ぶので、振り返ってみると、最前の囚人でした。近よって、何か用かと尋ねると、実は、あんなことをしたので、きびしく責められると覚悟していましたが、其後何の音沙汰もなく、私の房の前を通られる看守長さんは、何事もなかったように、普段とちつとも変らぬ御様子なのでびつくりしました。それは誰れにもは出来ないことです。何か尊いものを持つて

に、それを待つている、というような同じことばかり書いてきますので、今までは開封もせずに厩籠に投げ入れておりました。ところが、仏様のお話を聞くにつけ、はじめて母の心に気づかされ、一度会って詫びたいのですが、老いた田舎者の母に、遠くから面会に来て貰うことも出来ません。ご覧下さい、この通り釘折れのような文字ですが、今まで母は一度も筆を持ったことはありませんでした。私が入所してから、他人様に手紙を頼むわけにもいかなかった、難儀して字を覚えてこうして送ってくれますのです。それを思うとたまらないのです。そこで、こうしてこの封書を色色と持ちかえてみると、母がこれをポストに入れるまでに持つていたところにも触れたいと思つて、こんなことをしばらく繰返して開封しますと、母におかにか会ったように嬉しいのです、とのことでありました。

これを聞きまして、私自身親から貰った手紙を押しだいたことは一度もなかったことに気付き、またしても彼に先きを越された！と深く肝に銘じました。

こうした話を続けていきますと、隣房の囚人が、看守長さん、私にも聞かして下さいと申すようになり、念仏の花が次々と開きはじめました、不思議なことです」

これを聞いて、私自身第一に教えられたことは、火中の

蓮華という仏語がありますが、貪瞋の煩惱の焰の中に仏様がお念仏とあらわれて、自然に転悪成喜して下さることを実際に見せて貰ったことである。

第二には、讃岐の庄松同行が「俺がよろこぶと、人がそれを拾うてよろこんでくれる」という信味である。仏法は伝えるものではなくて、伝わるものだとかよく聞かされるが、看守長の信の喜びが、自然に人々に伝わって行く趣きに心うたれた。

無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまう。

小児往生のこと

福島政雄先生が大正八年八月に御息女和子様がにわかにな世を去られた時、その臨終近く、意識も明らかだった時、最後の言葉は「直ぐにおうちへかえりましょう」の一語であつた。奥さんが涙ながらに寄り添われて「ここが和ちゃんのおうちですよ」と云われると「さうでないの、すぐにおうちへかえりましょう」と言われた言葉が、先生の耳にとどまって、心不転倒、即得往生の仏語も思い合され、祈浄厭穢の大菩提心は御息女和子様をみ使として、彌陀の御心から先生の心へおとどけ下さったこととよと渴仰されて、次の歌をつくられた。

祈うべき弥陀の浄土をおしえつつ夢の此の世を子はさり
にけり

み仏の真実の證示しつつ浄土を指して子はゆきにけり
まほろしの世ぞとおしえてみ仏の刹にかえりぬ、あわれわ
が子は

子をおもふ心の闇の底までもてらすほとけの道ぞうれし
き
今ぞ知る大悲の御手に建てましし弥陀の浄土のふかきい
われを

児童の往生

これも私が京都の学生時代の事でした。福井県の若狭地方にまいりました時、或小学校の先生から「是非、学校でお釈迦様のお話をしてください」とたのまれました。その理由は次の通りでありました。先生曰く、
「わたしの受持の三年生の児童が、先日急病で亡くなったのですが、その時、児童の姉が、子供の机を整理していたら、次のようなことを書いていたのです。」

くと、お友だちがたくさんまわってしてくれるからさびしくないから」

と別の紙に書いて、自分が死んでもみんな安心してくれるようにと、別れのことばを残しておりました。

私もその時、この遺書を読ませてもらい、この児童こそ仏様の生まれかわりであつたと心に銘じました。こうしたことがあつたのに、その子は、別に変つた様子も見せず、いつものように学校に出ていて、土曜日になって、急に腹が痛いというので、早く家に帰して、二、三日で亡くなつた由でありました。

この村全体が真宗の門徒ばかりですが、とりわけ子供の親が熱心な信仰家でもありませんのに、不思議なこともあるものです。そのことがあつてから、学校の児童達の心にひどい衝動をうけているので、この際、お釈迦様のお話を聞かせてくださいとのことでした。

釈迦彌陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し
われらが無上の信心を 発揮せしめ給うなり
の御和讃を誦しながらお話をしたことです。

○ ○

お父さん、お母さん、ぼくが死んでもしんばいししないで
ください、お上土にゆくのですから。

お友だちへ。からだをたいせつにして、よくべんきょう
して、りっぱな人になってください。ぼくがお上土にい

今日は天気の良い日曜の朝です。勉強をしようと思つて机に坐ると、どこからともなく、これをあげよう！という声があったので、そちらをふりむくと、きれいな蓮の花であつた。ありがとうといって、それをうけとろうとすると、パツと消えてしまった。そのとき、お上土があつた。そして、あと十日するとそこへうまれることも知らされた。

ちようど、今日は朝から姉さんが、おなががいたいといつてねていたので、この姉さんともわかるのかとおもうと、たまらなくなつて、姉さんのふとんの中にはいつて、いたいかいと云いながら、せなかをさすつてあげていると、姉さんはスヤ／＼とねむってしまった。

家には、お父さんたちははたけにでかけているすだつたが、友だちとも近いうちにわかれるのがさびしいので、今日はいっしょに遊ぼうとおもつてでかけるとき、庭のたたきに、友だちのところへゆく、とチョークで大きく書いて、しんばいかけぬようにした。

あとがき

三伏の夏となりました。私の子供の頃「稲のことをひでり草というて、日照りが大切な」と祖父がいつも云っていたことが思い出されるこの頃です。又「御飯をこぼすと、目がつぶれるぞ」と云っていたことが、この年になつて思い出されるにつけ、幼い頃りかえして聞いたことは生涯心の底にのこることに驚かされ、よき教えは耳から目からたえず聞かして貰うていれば、ことばが肉体化して、内からヒョイ／＼と折にふれて自然に浮かび、心のもしびとなることもうなずかされました。池山先生の法味滴々は、身についたよきことばの自然の発露と申せましょう。

近角常音先生の御忌日が八月のはじめでありますので、先生の信仰筆録を抄出させて頂きました。常観先生を生涯「兄上々々」と随喜していられ、御尊父、常随法師の御墓に、御兄弟と一緒に御遺骨も納められました。御筆録によつて先生の御導きをいただきました。三河の殉教者は、多田先生が公にせられたものでありますが、私共の聞法の恵まれますために、文字通り捨身餓虎の御苦勞のありま

すこと知らされますことです。多田先生のお導きを蒙られた安城市の山本博雄様から頂いたもので改めて御礼申し上げます。

井上様は、如來の御恩について、御一代記聞書のころをお述べ下さいました。自分勝手な私は、親をさえ火鉢あつかいにしか出来ない忘恩の身なのに、そうした私をなおなお不愾に思召して下さいることに驚くばかりであります。

西元様が御紹介下さった「念仏世界—安部克巳の信と生涯」は私も奥様から頂きました。名大名誉教授岸本謙一先生と御一緒に来庵下さいましたこともあらたに思い出しております。有縁の方々のご購読をお勧め申し上げます。さらに足利浄円師の御忌法要の模様をお誌し下さいました。師は私の歩みをいつも見守つて下さつたことの数々を想い出して頂きました。

木村様は、入院以来段々と病状も落着き、近く退院出来るだろうとのおたよりでした。有縁の皆々様からの御心配を念仏裡に謝していられます。

さて、八月の私の定期の法縁は休ませて頂きます。これは例年のことで、とりわけ身体の悪いものではありません。

△御案内▽

(但し八月は休み)

○毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駈上町二の八六。鬼頭彦彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く)尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円(送共)
一 年 一六〇〇円(送共)

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八

電話八二一七〇三三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷

人 坂 部 光 雄

發行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四 五七

慈 光 社